

II B-7

マウス胃粘膜のペプシノーゲン I 産生細胞の発生に関する免疫組織化学的研究

片岡勝子、松本晶子

(広島大 医 解剖)

ICRマウスの胃体粘膜におけるペプシノーゲン I (PGI) 産生細胞の個体発生を、抗ラット PGI 血清を用いて、顕微鏡レベルでは PAP法、電顕レベルでは間接免疫金法により免疫組織化学的に観察した。

成熟マウスでは PGI 免疫反応性は主細胞と副細胞に認められる。主細胞のチモーゲン顆粒上には多数の金粒子が見られる。副細胞の粘液顆粒上の金粒子密度はさまざまであるが一般に主細胞よりも低い。しかし、粘液顆粒の免疫反応性の強さについては、なお、検討を要する。

胃腺は胎生16日に形成され始め、PGI産生細胞も同時に出現する。しかし生後14日までは PGI 産生細胞は一種類で原始主細胞と呼ばれる。原始主細胞は蛋白分泌性外分泌細胞の形態をし、良く発達した粗面小胞体と、暗い分泌顆粒を有する。多くの細胞では分泌顆粒上の免疫金粒子は極く少数である。稀に多数の金粒子をもつ細胞が存在するが、微細構造や分布からは他の原始主細胞と区別できない。生後21日には主細胞と副細胞が区別され、両細胞ともに分泌顆粒上に多数の免疫金粒子をもつ。これは、この時期に PGI が急速に増加するという生化学的研究報告と一致する。

II B-8

マウス肝臓のタウリン様免疫陽性構造

丁 維光¹、藤村昌樹¹、木村 宏²、
越智淳三²

(¹滋賀医大・第2外科、²同第2解剖)

(はじめに) タウリンは体内で最も豊富に存在する含硫アミノ酸で、肝臓では胆汁酸や薬物と抱合体を形成し、胆汁分泌や物質代謝に関与することがよく知られている。しかし、顕微鏡レベルでのタウリン存在様式については不明の点が多い。今回、マウスの肝臓におけるタウリンの細胞内局在をタウリン抗体を用いる免疫組織化学で検討したので報告する。

(方法) マウスを麻酔下に開胸し左心室より 37°C のリンゲル液を灌流し脱血後、引きつづきアルデヒド混合液で固定した。摘出肝臓を後固定(1日)のあとショ糖液に浸漬し、厚さ 20 μm の凍結切片を作製した。切片は浮遊状態で1次抗体(1万倍希釈)と3日間反応し、その後 ABC 免疫染色法で染色した。

(結果) タウリン様免疫陽性構造を含有する細胞は肝小葉内において明らかな分布の差が認められた。中心静脈周辺では陽性細胞はほとんどなく、肝小葉の外周に向かうにつれて陽性細胞の数が増加する。タウリン陽性構造は直径 0.5~1 μm の明瞭な顆粒状として認められる。これらの細胞1個あたりのタウリン陽性顆粒の数はほぼ一定で、数個~10個程度であった。